

幼稚園における生活発表会の取り組み：絵本の読み聞かせから劇遊びへ

川崎，徳子
那珂川市立南畑幼稚園主任教諭

<https://doi.org/10.15017/4763164>

出版情報：生活体験学習研究. 19, pp.59-61, 2019-07-31. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：



幼稚園における生活発表会の取り組み

～ 絵本の読み聞かせから劇遊びへ ～

川 崎 徳 子*

Living Recital of Kindergarten

～ from Reading Picture Book to Play at Play ～

Kawasaki Tokuko*

要旨 幼稚園では、毎日絵本の読み聞かせを行っている。クラスの中で、いくつかのお気に入りの絵本が出てきて、皆で楽しさや面白さを共有するようになる。幼児は絵本の世界に浸り、その登場人物の気持ちになりきって遊ぶようになる。皆で劇ごっこを楽しみ、遊びに必要なお面や小道具などを作り始める。劇ごっこをするうちに、そのクラスならではのエピソードが加わり、お話はどんどん膨らんでいく。皆で作った劇を、今度はお客様に見せたいという欲求が高まる。その対象は他学年であったり、保護者であったりと、広がっていく。この気持ちの高まりが、生活発表会という行事につながっていく。取り組みの中で、幼児は自分の意見を言ったり、考えを出し合ったり、相手を認めたりと、たくさんの経験をしていく。その中で、豊かな感性が育っていく。

1 はじめに（絵本の読み聞かせについて）

幼稚園では、入園した幼児に、毎日絵本の読み聞かせを行う。絵本を通して、お話の世界の楽しさ、まだ経験していないたくさんのことを知る楽しさ、教師への信頼等を感じとらせていく。入園前の幼児の絵本経験には大きく差がある。読み聞かせをたくさん味わってきた幼児と、そうでない幼児がいる中、クラスの幼児の実態を十分に把握しながら、お話の世界にひたる楽しさを味わわせていく。

幼児は絵本の中の繰り返しの内容を好み、その場面を覚え、そして、何度も教師に同じ絵本を読んでほしいと願うようになる。教師の話す繰り返しの場面に期待をし、喜んだり笑ったりと、大きく反応を示す。また、教師や友達と絵本の中の言葉を一緒に言うことで、皆との一体感が生まれていく。

絵本の選択については、その年齢や発達を考慮し、内容の簡単なものから、少しずつ複雑なものに変化させていく。（絵・内容・言葉・表現等であ

る。）また、その他に、季節や行事に関するもの、幼児が興味・関心をもったもの、今教師が伝えておきたいもの、等が加わる。

2 絵本の楽しさがわかり、絵本の世界にひたる

この絵本の経験を毎日十分に楽しんだところで、幼児は絵本の中に出てくる食べ物を食べるまねをしたり、動物のまねをしたりするようになる。それは、教師との言葉のかけあいであったり、みんなで同じ動物に変身しての表現遊びだったり、遊びはどんどん広がっていく。この活動は、絵本の中にとどまらず、集いの中での表現遊びや保育室や園庭でのごっこ遊びへと変化していく。

3 劇遊びへの発展

では、どんな絵本が幼児の表現意欲をかきたてていくのか、今までの教育活動の経験から数点あげてみる。

*那珂川市立南畑幼稚園主任教諭・西日本短期大学非常勤講師

連絡先：〒811-1232 那珂川市大字埋金811番地1 TEL 092-952-2095 FAX 092-952-2305

○おおきなかぶ¹⁾

○3びきのこぶた²⁾

○3びきのやぎのがらがらどん³⁾

○てぶくろ⁴⁾

○あかずきん

○おおかみと7ひきのこやぎ

○ももたろう

○一寸法師

○泣いた赤鬼

○エルマーのぼうけん⁵⁾

○どうぞのいす⁶⁾ 等

これらの絵本（お話）の共通点は、内容が幼児にわかりやすく、繰り返しがあり、楽しい、ということである。特に昔話や童話が取り組みやすかったと感じる。

2学期に行われる運動会で、幼児は体を思い切り動かす心地よさ、発表や表現の楽しさを味わい、また、皆で1つのことに取り組み、最後までがんばろうとする気持ちをもつようになる。この機会を逃さず、さらに教師はいろいろな絵本を読み、お話やお話を作る楽しさを感じ取らせていく。そこで、絵本を通しての劇遊びが発展し、自分たちで好きな役を決めたり、交代したり、いろいろな発想で言葉や動き（動作）を作ったりし始める。年長児は昨年の年長児の活動を見たり、招待されたりした経験から、また年中児は、今年度の年長児からの刺激により、「お客様を呼んで、劇を見せたい。」という欲求をもつようになる。それまではクラスの集いの中で演じていたものが、椅子を並べ、入り口やチケットを作り、好きな遊びの時間に他クラスや他学年を招くなどの活動に発展していく。また、お話に必要な小道具や衣装を、自分たちで進んで作るようになる。また、欲しい材料を教師や家庭に求めるようになる。しかしまだこの段階では、役割は流動的で、誰がどの役を演じていてもよいし、たとえば一人の役であっても何人で演じていてもよい。また、役を演じる人がいなくて、お話が進まない時には、そこで話し合いが行われる。誰かが役を買って出ることもあり、或いはその役割を省くこともあり、状況によっては教師が役を務めることもある。幼児はその話し合いの中で、折り合うことや譲ること、反対に意見を主張することを学んでいく。

4 生活発表会に向けて

このように、幼児が十分に劇遊びを楽しんだ頃合いを見計らい、教師は「(劇を) 今度はお家の方やお客様にも見せよう。」と提案していく。幼児の気持ちが高まるのをみて、更に「生活発表会」を提案し、この大きな行事に向けての取り組みを進めていく。

幼児が十分に好きな役割を楽しんだところで、最終的にどの役割を演じるかを決定する。教師は幼児の気持ちや願いをよく聞き、配役について、またその役割の人数も、皆で納得のいくまで話し合うことを大切にする。それから劇遊びに必要な小道具やお面等を作っていく。何度も遊ぶうちに小道具やお面が壊れたり、修理の必要なものが出てきたりするので、その都度、幼児が自分で（難しいところは教師が手伝いながら）作り直していく。劇に必要な木や岩、草等の大道具作りも、幼児が参加し関われる部分を用意することで、生活発表会への意欲や期待を高めていくことができる。言葉（台詞）も、はじめは絵本の通りに言っているだけだが、幼児が互いにアイデアを出し合い、話し合っていくことで、そのクラスならではの言葉に変わっていく。同様に、幼児の今までの経験が加わり、劇の中での動作にもクラスの特徴が表れてくる。この変化（成長）は生活発表会当日まで、実はその後も続いていく。皆で作った言葉（台詞）と動作（動き）は、皆で共有しているので、誰でもどの役割も演じられるようになっている。その姿は、毎日降園時に保護者にも伝え、教師と保護者でその成長を共有していく。また、お話の内容へのよりよい理解を促すため、絵本を事前に保護者に渡し、輪番で読んでいただくこともある。こうして、生活発表会当日を迎えるのだが、各家庭には、教師からの毎日の報告やクラスだより（生活発表会だより）等で幼児の成長を詳しく伝えているので、保護者の理解を得ることができ、「ここがよかった」と具体的にたくさんほめてもらうことができる。たとえ、当日幼児が緊張しても、これまでの過程が大切だと伝えてきているので、保護者は幼児を温かく見守っている。たくさんのお客様の拍手や保護者の褒め言葉が幼児に達成感を与え、大きく成長させていく。

5 生活発表会を終えて

この生活発表会の経験が大きな自信となった幼児は、また、役割を交代しながら、翌日からもしばらく劇遊びの余韻を楽しむことになり、その経験は、その後の園生活にも良い影響を与えていく。他学年が劇遊びに加わってみたり、互いの劇遊びの内容を交代して演じてみたりする。教師がその後の機会（お楽しみ会やお別れ会、誕生会等）に演じると、幼児は喜んで、教師に「こうしたほうがよい」、などとアドバイスをしたり、手本を見せたりして楽しむ。保護者が幼児に内緒で劇の練習をして、我が子の演じた役で劇を見せてくれたことがあった。幼児の驚きと喜びは大きく、その後の家族の良い思い出となったようだ。このように、一つの活動が、どんど

ん膨らみ、成長していく。

6 終わりに

以上、絵本から劇遊びへの広がりについて述べたが、昔話や童話の題材に加えて、幼児の生活の中から題材（内容）を取り上げ、加えていくと、さらに幼児に身近で楽しい劇遊びになると考える。幼児の表現を広げる機会は、園生活の中にたくさんあり、その機会をとらえて、幼児の健やかな成長につなげていきたい。

注

1)～5) 福音館書店版

6) チャイルド社版 (その他の絵本は各社から出版)